

第28回(1996年度)サントリー音楽賞
受賞者は園田高弘、湯浅譲二 両氏に決定

毎年わが国の洋楽の発展にもっとも顕著な業績をあげた日本人に贈る「サントリー音楽賞」の第28回(1996年度)受賞者は、園田高弘、湯浅譲二 両氏に決定した。

1. 1997年1月15日(成人の日)午前10時より東京丸の内の東京會館において、選考委員12名の出席により第一次選考を行い、「候補者」を選定した。
2. 引き続き3月12日(水)午前10時より、東京紀尾井町のザ・フォーラムにおいて選考委員10名の出席(松本・三宅両委員は書面参加)により最終選考会を開催、慎重な審議の結果、第28回(1996年度)サントリー音楽賞受賞者に園田高弘、湯浅譲二 両氏が選定された。そして、同日午後開催の理事会において正式に決定された。
3. 園田高弘、湯浅譲二 両氏の選考理由は別紙のとおり。
4. 選考委員は下記の12氏。
磯山 雅・岩井宏之・小石忠男・白石美雪・武田明倫・中河原理
丹羽正明・藤田由之・船山 隆・松本勝男・三宅幸夫・三善 晃
(敬称略・50音順)

園田高弘（ピアノ）

<贈賞理由>

日本のピアノ界にあって長くその中心的役割を担ってきた園田高弘氏は、いまや名実ともに現役ピアニストのうちで長老格の重みを備えてきた。戦後の音楽界で、いち早く早期教育を受け、その卓越した技巧と堅固な音楽性によって、氏の活動は常に注目を集めてきた。国内における無数のリサイタル、アンサンブル、協奏曲の演奏はもとより、ベルリン・フィル、ウィーン・フィル、ドレスデン・シュターツカペレなど海外のトップクラスのオーケストラとも協演を重ね、カラヤン、サヴァリッシュ、クリュイタンスなど一流指揮者との協演も多い。

去年は、11月末、東京の紀尾井ホールでベートーヴェンによる独奏会を二夜連続して行なったが、余分なものをそぎ落して作品の核心を洗い出し、本質を磨き出した、極めて純度の高い、そして充実したものとなって、日本人が到達したひとつのベートーヴェン像というに値するものになっていた。このコンサートは、実は去年、ベートーヴェンのピアノ・ソナタ全曲レコーディングが完成したのを記念して行なわれたものだが、それも氏にとっては三度目の全曲レコーディングであり、これは世界的にみても例の少ないものである。なお去年リリースされた5点のベートーヴェンのCDのうち、「ハンマークラヴィーア・ソナタ」を含むものは、レコード・アカデミー賞（日本人演奏部門）を受けている。

去年は、ほかに6月に東京交響楽団、9月に京都市交響楽団、新星日本交響楽団とブラームスの協奏曲第2番を、2月には神奈川フィルハーモニーと第1番を演奏したほか、5月にはオール・シューマン、11月にはオール・ショパン・プロによるリサイタルを開くなど、旺盛な活動を見せている。

また氏は海外のコンクールに審査員として招かれることも多く、去年はブゾーニ国際コンクールに参加している。さらに1985年から、大分県では毎秋、園田高弘賞ピアノ・コンクールが行われており、新人の発掘にもひと役買っている。現在、68才を迎えた氏はいま円熟のさなかにあるといえよう。

・

<略歴>

1928年東京生まれ。幼少より早期音感教育を受け、1939年よりレオ・シロタに師事。1950年渡欧、パリにてM. ロン、ベルリンにてH. ロロフに師事。

1948年日比谷公会堂でデビューリサイタルを行う。1954年初来日したカラヤン指揮のNHK交響楽団と協演、翌年ベルリン・フィルの定期公演に招かれる。以後国内外で長年にわたり、リサイタル、協奏曲、室内楽とめざましい活躍を続け、特にドイツ音楽の演奏にかけては他の追随を許さない存在、と定評がある。またシェーンベルクやメシア

ンがかつて前衛と言われていた時代、彼らの作品の日本初演を数多く行った。指揮者ではカラヤン、チェリビダッケ、クリュイタンス、サヴァリッシュ、ブロムシュテット、テイト等、オーケストラでは国内の主要オーケストラの他、国外ではベルリン・フィル、ウィーン・フィル、ドレスデン・シュターツカペレ他多数、室内楽でもボロディン、ムジークフェライン、アルティス各弦楽四重奏団など著名なアーティストと数多くの協演を重ねている。

海外のコンクールから審査員として招かれることも多く、ジュネーヴ、チャイコフスキー、ショパン、エリザベート、ブゾーニ他の各国際コンクールに参加、1993年にはミュンヘンで審査委員長を務めた。

これまでの演奏活動の中でもベートーヴェンのピアノソナタ、ピアノ協奏曲、ブラームス、ショパンのピアノ協奏曲の全曲演奏会をはじめ、集中的にオール・バッハ、オール・シューマン、オール・リストの演奏会を開く等特筆すべきものも多く、演奏家としての使命をもって絶えず創造的な活動を行っている。名実ともに日本を代表する巨匠であり、重鎮である。

これまでに1971年日本芸術院賞、1977年モービル音楽賞、1990年第2回飛騨古川音楽大賞、1996年レコードアカデミー賞（日本人演奏家部門）等を受賞。

・

湯浅譲二（作曲）

<贈賞理由>

湯浅譲二氏は「真の人間とは何か」をテーマに、コスモロジックな視点からのアプローチを試みてきた作曲家である。1981年から94年まで、十数年にわたってカリフォルニア大学サン・ディエゴ校の教授をつとめながら、意識的に自らの根源にある「日本」を掘り起こし、オーケストラや室内楽から劇音楽、電子音楽、コンピューター音楽といった幅広いジャンルで独創的な仕事をしてきた。おのずとその作品は、日本の伝統に連なる湯浅氏の内なる感性と現代の科学の発展を見据えた独自の視点に裏打ちされた、個性的な内容となっている。88年から企画構成を担当してきた郡山国際テクノ・ミュージック・ビエンナーレの成功は、テクノロジーと音楽の関わりを常に創作のひとつの軸として追求してきた湯浅氏の作曲家としての資質に負うところが大きい。

1996年の主な成果としては、サントリーホール十周年記念の委嘱作品として10月28日に初演された《ヴァイオリン協奏曲 — イン・メモリー・オブ・武満徹》が挙げられる。「実験工房」以来の友人であった武満氏の思い出に捧げられた作品で、成熟した筆致によって仕上げられていると同時に和声語法やメロディの紡ぎ方にこれまでにない側面をみせ、湯浅氏の作風に新たな1ページを加える作品となった。昨年はまた、11月27日

にニューアーツ弦楽四重奏団のコンサートにおいて《弦楽四重奏のためのプロジェクションII》、4月13日に、さいたま芸術劇場において《五人の奏者のための「序破急」》が初演され、高い評価を受けている。なお、戦後50年を記念してレクイエムの各曲を、敵対国となった国々の作曲家たちに委嘱した世界の14人の作曲家によるコラボレーション《和解のレクイエム》に、湯浅氏はベリオやツェルハ、ペンデレツキらと並んで日本で唯一の作曲家として参加し、第13曲〈レスポンソリウム〉を書いたCDが昨年のレコードアカデミー賞に輝いたことも付記しておきたい。

・

<略歴>

1929年福島県郡山市生まれ。少年期より音楽活動に興味をおぼえ、独学で作曲を始める。49年慶応大学教養学部医学部進学コースに入学。51年同コース修了後中退。在学中より秋山邦晴、武満徹らと親交を結び、51年に結成された「実験工房」に52年から参加、以後作曲に専念する。

以来、オーケストラ、室内楽、合唱、劇場用音楽、インターメディア、電子音楽、コンピューター音楽など、幅広い作曲活動を行っており、国内はもとより、世界の主要オーケストラ、フェスティバルなどから多数の委嘱を受けている。これまでにニューヨークのジャパン・ソサエティ、DAADのベルリン芸術家計画、シドニーのニュー・サウス・ウェールズ音楽院、トロント大学など世界各国から招聘を受け、また、ハワイにおける今世紀の芸術祭、香港のアジア作曲家会議、英国文化振興会主催の現代音楽巡回演奏会、アムステルダムの作曲家講習会などに、ゲスト作曲家、講師として参加するなど、国際的に活動している。

81年以降94年までカリフォルニア大学サンディエゴ校教授（現在、名誉教授）、近年は東京音楽大学、日本大学芸術学部でも教鞭をとり、教育と研究の場でも活躍している。

これまでに〈オーケストラのためのクロノプラクティス〉が73年第21回尾高賞、73年文化庁芸術祭大賞、〈オーケストラのための透視図法〉が83年文化庁芸術祭大賞、〈ヴィオラとオーケストラのための啓かれた時〉が88年第36回尾高賞、〈ピアノ・コンチェルティーノ〉〈交響組曲「奥の細道」〉の成果に対して95年飛騨古川音楽大賞、95年京都音楽賞大賞〈ヴァイオリン協奏曲 — イン・メモリー・オブ・武満徹〉が96年第45回尾高賞、等多数受賞。

近作に、〈「和解のレクイエム」第13曲 レスポンソリウム〉（95年）、〈五人の奏者のための「序破急」〉（96年）、〈弦楽四重奏のためのプロジェクション第2番〉（96年）、〈ピアノ・トリオのためのソリチュード・イン・メモリアル T. T.〉（97年）等がある。

以 上